

町小だより

令和5年
11月30日
No. 680
御免町小学校

「生きる」をつなぐ

校長 相澤 祐助

11月16日に、人権教育の授業が御免町小学校で行われました。講師は、宮崎 保さん。歌と語りで6年生の人権意識に火を灯してくださいました。その宮崎さんが最後に語った言葉「生き抜け！」で、私も35年前の出会いを思い起こしたのです。

昭和63年に私は教員となり、加治川村立新金塚小学校に赴任しました。子どもたちの前に立つ以上、自らに何かを課そう、「挑戦」を決意しました。そうマラソンです。そのために、週に3日ほど、アパートのある新発田市豊町から学校まで走って通勤しました。約10kmの道のりは、日々の自分を追い込みますが、充実感もありました。しかし、走り過ぎがたたりに、10月下旬の土曜日、41度の高熱を發しました。寝ていれば治るだろうと高をくくっていましたが日曜日になっても下がりません。翌月曜に受診した結果、「敗血症の疑い」ということで県立新発田病院に緊急入院となり、すぐに手術をしました。走り過ぎたことで左右のおしりがこすれ、そこにばい菌が侵入し、悪さをしたようです。化膿した場所を切除し、2週間ほど放置状態に。縫合後によりやく病室を出て、自分で歩けるようになりました。ある朝、洗面所で左足の無い少年、Kさんに出会いました。毎日、洗面所で会うので、徐々に話をするようになりました。

私は、自分が教師であること、どうして入院することになったのかその経緯を話しました。Kさんも、自分は中学3年で、陸上部に入っていること、さらに、義足を付けてでも高校に入って陸上を続けたいという「夢」を語ってくれました。「相澤さんは教師なんですよ。ぼくに勉強を教えてくださいませんか。3月の入試に向けて勉強をしているんだけど分からないところがあって・・・」入院生活に日々悩んでいたもので、「いいよ。やろう！」と伝え、私はKさんの病室に毎日のように通いました。主に数学と一緒に勉強しました。「相澤さん、勉強って楽しいですね。この調子で高校受験に挑戦します！」とKさんは笑顔を見せていました。

しかし、12月上旬、Kさんの病室には「面会謝絶」の札がかかっていました。翌日、再びKさんの病室に行くと、Kさんのお母さんが、「相澤さん。これまでありがとうございました。Kは今朝、旅立ちました。骨肉腫という恐ろしい病がKにとりつき苦しんでいました。でも、相澤さんと過ごした日々が嬉しそうでした。夢と目標に向かう息子の姿が素晴らしい思い出です。Kは、相澤さんに『生きる喜びを、ぜひ子どもたちにつないでください。生きたくても生きられなかった自分の分も』と言っていたのでお伝えします。」

私は、12月中旬に無事退院し、学校に戻りました。約2カ月間、学校を空けましたが、クラスの子どもたちが温かく私を迎えてくれました。「生きる」「生き抜く」素晴らしさ、重さ、大切さを改めて感じました。

Kさん、これからも私は、「生きる」ことの大切さを子どもたちに伝えますよ！